

☆聖家族(12月31日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

### 第一朗読 (創世記 15章 1-6節、21章 1-3節)

その日、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」見よ、主の言葉があった。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。主は、約束されたとおりのサラを顧み、さきに語られたとおりのサラのために行われたので、彼女は身ごもり、年老いたアブラムとの間に男の子を産んだ。それは、神が約束されていた時期であった。アブラムは、サラが産んだ自分の子をイサクと名付けた。

### 第二朗読 (ヘブライ人への手紙 11章 8、11-12、17-19節)

皆さん、信仰によって、アブラムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。それで、死んだも同様の一人の人から空の星のように、また海辺の数えきれない砂のように、多くの子孫が生まれたのです。信仰によって、アブラムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。この独り子については、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われていました。アブラムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。

## 福音朗読（ルカによる福音書 2章 22-40 節）

さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子イエスを主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。

シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。— あなた自身も剣で心を刺し貫かれます — 多くの人々の心にある思いがあらわにされるためです。」

また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

## 朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

皆さま、おはようございます。今日は今年最後の主日、最後の日大晦日となりました。今年最後の最後に風邪をひき、こじらせて今ようやくこの記事を書いています。今まで新型コロナにもインフルエンザにも罹ったことがなかったので大変でした。

さて今日はイエスを囲むマリアとヨセフの家族を記念します。人となられた神の子イエスの家族の生活はいったいどんなものだったのでしょうか。聖書にはほんの少ししか書かれていません。きっとほかの人たちと大きな差はなかったでしょう。ヨセフは父親として仕事をして家計を助け、マリアは母親として家事や育児をこなしてイエスを育て上げるのに全力を尽くしたことでしょう。教会はこの聖家族の祝日を通して何を私たちに伝えたいのか考えてみましょう。

### 第一朗読（創世記 15章 1-6節、21章 1-3節）

高齢になっていたアブラム(後のアブラハム)に主なる神が語りかけられます。「あなたの受ける報いは非常に大きい。・・あなたから生まれるものが後を継ぐ。・・」と。イサクが生まれたが、そのイサクも神は生贄としてささげよと仰せになり、アブラハムはその通りに実行しようとしています。神は直前にイサクを捧げることをやめよと仰せになり、アブラハムの信仰の深さを受け入れられたのです。家族の歴史には様々な困難、悲しみが待ち受けています。その中で神に対する信仰が試され強く、清められていくのを教えてくれています。

### 第二朗読（ヘブライ人への手紙 11章 8、11-12、17-19節）

この手紙の著者は信仰者の模範としてアブラハムの信仰を取り上げています。直前の文章の中にこう記しています。「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」と。神に導かれる生活を希望し、その事実を毎日の生活の中で確認していくことと言えるでしょう。毎日の生

活の中で神の導きを確認していくこと。これが祈りというものです。与えられた恵みを確認し。感謝をささげることが祈りなのです。

### 福音朗読（ルカによる福音書 2章 22-40 節）

ルカは清めのためにエルサレム神殿に出かけてきたイエスとその両親が出会った不思議な人たちのことを記しています。その人たちから色々話しかけられ戸惑う両親の姿が描かれています。私たちの生活の中で多くの人たちとの出会いは避けられません。良い話もあるでしょう。嫌な話もあるでしょう。マリアもヨセフもそのような話の中で神にじぶん達を委ねていったのです。「お言葉の通りになりますように」と天使に応えたマリアの信仰が様々なことを乗り越えさせていったのです。ヨセフもまた天使の言葉を少しも疑わずその通りに行動したのです。



ナザレにある教会の聖歌族の絵（2017）

P.S.

この一年、神さまからいただいた恵みを感謝して新年を勇気をもって迎えましょう。

カトリック足立教会  
主任司祭 野口重光